

安達高等学校創立九十周年記念式典 福島県高等学校長協会長祝辞

平成25年9月28日（土） 13時
二本松市民会館

ただいま御紹介いただきました、福島県高等学校長協会長を務めております安積高等学校長の久保田範夫でございます。県高等学校長協会を代表いたしまして、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

安達高等学校の創立90周年を心からお祝い申し上げます。
(また、本日、感謝状・表彰状を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。)

旧制安達中学校が創設された90年前の大正12（1923）年に目を向けてみますと、9月1日に関東大震災が発生、10月にはウォルト・ディズニー・カンパニーが創立され、井伏鱒二の『山椒魚』が発表されたのもこの年であり、作家の司馬遼太郎さんや池波正太郎さん、俳優の三國連太郎さんらが誕生し、御存命の有名人では、英文学者であり言語学者の外山滋比古さん、小説家の佐藤愛子さんらが、この年に誕生しています。

さて、私は新採用の只見高校時代から今まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚え歌えるように心がけてきました。それは、校歌の歌詞にその学校の創立以来の校訓や精神、スピリットが込められていることが多いからであり、また、校歌を歌うことでその学校と生徒を好きになれるからであります。

今回、安達高校の校歌を拝見して、すぐに好きになりました。

安達のまゆみ 古しえの 歌によまれし 跡遠し
安達の名負う 高校の 健児きたえよ 心と身
健児きたえよ 身と心

歌詞のエッセンスは「**安達のまゆみ**」であることは言うまでもありませんが、「**まゆみ**」という木は、（安達地方に縁が深く、万葉の昔から多くの和歌に詠み込まれてきたことは〈 〉の祝辞にもあったとおりであります、）

（この木は）材質が強い上によくしなり、古来弓の材料として知られ、こけしや将棋の駒としても作られたのですが、また、高級和紙である**檀紙（だんし）**の原料であったことについても、ご存じの方が多いことと思います。（**檀**の解字）

檀紙は、現在は楮^{こうぞ}を原料として作られ、縮緬状のしわを持つ厚手で美しい白色が特徴ですが、古くはまゆみ（檀/真弓）の若い枝の樹皮の繊維を原料として作られたためにこの名があります。また、陸奥国が主な産地であったために「みちのくのまゆみ紙」後に陸奥紙（みちのくがみ）とも呼ばれました。産地が陸奥国のどの辺りなのかは特定できないのですが、現在でも二本松市の旧安達町・上川崎地区で漉かれている手漉きの「上川崎和紙」があるということは、この安達地方が産地の一つであったことに間違いのないと思われます。ちなみに、二本松出身で私が勤めている安積の卒業生（32期）ですが、旧制安達中学の教壇に立ったことがある東野辺薫の昭和18年の芥川賞受賞作品・小説『和紙』は、上川崎を舞台に描かれています。

（奇しくも、今朝の民報・「ふくしま人」連載記事で東野辺氏を特集）

話を戻しますが、

檀紙は、『源氏物語』や『枕草子』にも「陸奥紙」として登場するなど、平安時代以後、高級紙の代表とされ、徳川将軍による朱印状も原則として檀紙が用いられるなど、和紙の中でも重要な位置を占めていたようです。

源氏物語には、「いと香ばしき陸奥紙」「ふくよかなる陸奥紙」などと表現され、陸奥紙が出てくる場面は、光源氏から紫上へ書いた手紙の他にも末摘花の恋文など、何度も登場していますし、『枕草子』277段「御前にて、人々とも」には、「～よき筆、白き紙、陸奥紙など得つれば、こよなう慰みて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめり、となむおぼゆる。」（訳してみると、この世に住みたくなさく、どこかへ行ってしまいたいと思う時に、陸奥紙などが手に入れば、この上もなく心が慰んで、ままよ、こうしてしばらくでも生きていてもいいなという気になります。）と書かれており、平安期を代表する紙の一つとして、いかに人気があったかを示しているエピソードです。

なぜ私が、この檀紙、陸奥紙の話をしたかですが、一つには、木から紙を漉いて作るためには、かなり高度な技術が必要であり、千年以上前の陸奥、この「安達」の地に優れた特産物・陸奥ブランドがあったのであり、特産物があるということは地元の誇りであり、大切に守り続けていかなければならないと考えます。平成13年開館の「二本松市和紙伝承館」がその役目を担っていくのでしょう。

また、和歌の贈答や気持ちの遣り取りが手紙という「紙」を媒体として行われてきたのであり、まさに日本の伝統文化を支えてきた日本の文化そのものと言ってもいいのではないのでしょうか。

そして、「紙」はまた学校文化をしっかりと支えているのです。生徒の皆さんが学校で過ごす時間の中でも、紙でできた教科書とノートと接している時間が最も長いはずです。もちろん、学校もICT化が進み、電子黒板や、情報などパソコ

ンを使った授業が導入され、生徒の皆さんの使う辞書も、以前は国語辞典、古語、漢和、英和、の少なくとも4冊の辞書を入学当初に買ったはずですが、最近では辞書を買ったとしても、電子辞書一つを買えば何十冊もの辞書が入っていて、それだけで済ませてしまえる、という時代になりました。

しかし、私は、学校で学ぶことを確実に身に付けるためには、紙の存在が欠かせないと考えています。英単語を見る、自分で発音する、(最近では電子辞書でネイティブスピーカーの発音を聞くこともできるようですが・・・)、手を使って紙のノートに書く、何度も書く、手が痛くなるほど書く、一晩でボールペンのインクが半分になるまで書く、この当たり前の地道な繰り返しが記憶を定着させ、40年50年経っても忘れない、或いは忘れていてもちょっとしたきっかけやヒントで微積分ができたり、平家物語の冒頭がすらすらと出てくる、ということになるのだと思います。

話が少しそれましたが、こうしてみると「まゆみ」の木から、生きていくための狩り、狩猟に使った弓が生まれ、その同じ「まゆみ」の木から日本の文化そのものと言っていい陸奥紙が生まれたということは実に不思議なことであります。

安達高校が伝統として受け継いでいる「まゆみの精神」について校長先生に伺ったところ「強靱であれ、その木の如く、しなやかであれ、その枝の如く」ということでした。この「まゆみの精神」をモットーに、勉学と部活動の文武両道を目指して励んでいる安達高校の生徒の皆さん、この地が「**みちのくのまゆみ紙**」「**陸奥紙**」の産地であったこと、その紙が学校文化を、そして皆さんの勉強を支えていることを忘れずに、ふくしまの、東北の、日本の、そして世界のためにできることを早く見つけて、将来、地元福島の再生のために力を発揮できる人となってください。

卒業生は二万九千名余を数え、国内外の各界で活躍していると伺っていますが、その先輩の方々や地域の皆さんが見守ってくれています。面倒見のよい先生方が導いてくれます。

安達高校の生徒の皆さん、夢を見つけ、その夢に向かって、時には生きるためにまゆみで作った弓のような強さとしなやかさを発揮しながら、日本の文化を支えてきた「**みちのくのまゆみ紙**」に思いを馳せて、充実した高校生活を送ってください。

長くなりましたが、私のお祝いの言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。